

## 精神発達障害児の把握における1歳6ヶ月児健診 および3歳児健診の役割

徳 広 美 紀<sup>1)</sup>, 大 原 啓 志<sup>2)</sup>

### 要約

地域の障害児の発見と療育のあり方に関する実態調査を開始するに当たり、本年度は予備調査として、精神発達障害の早期発見における3歳児健診の寄与に関して、1歳6か月児健診のそれと比較しながら検討した。その結果、精神発達障害を有する児の内、健診で障害を初めて指摘されていたのは、1歳6か月児健診で18.4%、3歳児健診で14.9%、双方合わせると33.3%であった。また、3歳児健診では既に療育機関によりフォローされている障害児が1歳6か月児健診に比べて多く、過半数以上を占めていた。

見出し語：精神発達障害児、1歳6か月児健診、3歳児健診

### 1 目的

地域の障害児の発見と療育のあり方について今後の向上を図る基礎となる資料を得るために、把握された障害児における生後の保健医療福祉サービスについて実態調査を実施中である。昨年度はその予備調査として、精神発達障害の早期発見における1歳6か月児健診の寄与を評価したが、今年度はさらに3歳児健診の寄与に関しても評価を行った。

### 2 対象および方法

対象は昭和58-62年に高知市で出生した児の内、平成元年10月までに精神発達遅滞、自閉症、多動傾向などの精神発達の問題を主とする障害のために高知県児童相談所、高知県精神保健センターを受診した児87名である。

調査の方法は、対象児の健診カルテ及び受診機関の記録を収集し、障害の種別、健診受診の有無、及び健診の判定結果などを検討した。なお、発達指数は原則として津守式乳幼児精神発達質問紙法によるものを用い、一部、田中ビネー知能検査法によるもので代替した。

1)高知県佐川保健所 2)高知医科大学公衆衛生学教室

(事務局：高知県佐川保健所 〒789-12 高知県高岡郡佐川町甲1243-4, ☎ 0889-22-1240)

### 3 結果及び考察

#### 1) 報告された精神発達障害児の頻度

精神保健センターおよび児童相談所から報告された精神発達障害児（昭和58年～62年出生）の内、精神発達遅滞は肢体不自由を合併するものを含めて50名（出生千対 2.7）、自閉症は16名（出生千対 0.9）、多動傾向の児は15名（出生千対0.9）であった。

#### 2) 障害児の健診受診率

報告された障害児の健診受診率を表1に示した。高知市の一般児の受診率は1歳6か月児健診85%前後、3歳児健診75%前後であるが、それと比較して、注意欠陥障害以外では、自閉症の37.5%など障害児で低い傾向であった。

#### 3) 健診での障害の初回指摘

障害児の内、健診で障害を初めて指摘された者を表2に示した。

精神遅滞50例の内、5例（10.0%）は1歳6か月健診で、9例（18.0%）は3才児健診で初めて指摘されていた。

自閉症では、16例の内6例（37.5%）が1歳6か月健診で、1例（6.3%）が3歳児健診で初めて指摘されており、注意欠陥障害では15例中5例（33.3%）が1歳6か月健診で、3例（20.0%）が3歳児で初めて指摘されていた。

精神発達障害全体では、87例中16例（18.4

%）が1歳6か月児健診で初めて指摘され、13例（14.9%）が3歳児健診で初めて指摘されていたことになる。

表1 障害児の健診受診率

	障害児数	健診受診数・率	
		1Y6M健診	3Y健診
精神遅滞*	50	28 (56.0%)	31 (62.0%)
チック症候群	6	3 (50.0%)	2 (33.3%)
自閉症	16	11 (68.8%)	6 (37.5%)
注意欠陥障害	15	13 (86.7%)	12 (80.0%)

\* 肢体不自由を合併する児も含む

表2 健診で障害を初めて指摘された者

	障害児数	初回指摘数 (%)	
		1Y6M健診	3Y健診
精神遅滞*	50	5 (10.0%)	9 (18.0%)
チック症候群	6	0 (0.0%)	0 (0.0%)
自閉症	16	6 (37.5%)	1 (6.3%)
注意欠陥障害	15	5 (33.3%)	3 (20.0%)
計	87	16 (18.4%)	13 (14.9%)

\* 肢体不自由を合併する児も含む

表3 障害児の健診判定結果

(上段1歳6か月健診、下段は3歳児健診)

	既に フォロー中	要精密・ 要観察	異常 なし	計
精神 遅滞+	2	0	0	2
肢体 不自由	3	0	0	3
精神	9 (39.1%)	5 (21.7%)	9 (39.1%)	23
遅滞	16 (64.0%)	9 (36.0%)	0	25
自閉症	0	6 (54.5%)	5 (45.5%)	11
	5 (83.3%)	1 (16.7%)	0	6
注意欠 陥障害	2 (18.2%)	5 (45.5%)	4 (36.4%)	11
	9 (75.0%)	3 (25.0%)	0	12

4) 健診を受診した障害児の健診判定結果

健診を受診した障害児の健診判定結果を見ると(表3)、精神遅滞、自閉症、注意欠陥障害のいずれにおいても、1歳6か月健診に比べ、3歳児健診の方が“既に療育機関等でフォロー中”の児が多く、過半数以上が既にフォローされていた。また、3歳児健診を受けた障害児の内の多くが既にフォローされていることもあり、3歳児健診では障害児を“異常なし”と判定していた例、すなわち見逃し例は見られなかった。

以上より、3歳児健診は1歳6か月健診に比べ、障害のスクリーニング機能(2次予防)の意義はより小さいものと考えられた。

今回の予備調査は、精神発達障害児の療育機関2施設に対する調査であり、今後、調査施設を広げて対象児をさらに網羅する必要がある。

また、障害児の障害発見経路や経過については健診発見のもの以外は今回詳細に情報を得られていないため、今後の本調査ではこの点も充実させてゆきたい。

4 文献

徳広美紀, 他: 精神発達障害児の障害発見における乳幼児健診の役割—1歳6か月健診の評価—, 四国公衆衛生学会雑誌, 第35巻1号, 1-6



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 要約

地域の障害児の発見と療育のあり方に関する実態調査を開始するに当たり、本年度は予備調査として、精神発達障害の早期発見における3歳児健診の寄与に関して、1歳6か月児健診のそれと比較しながら検討した。その結果、精神発達障害を有する児の内、健診で障害を初めて指摘されていたのは、1歳6か月児健診で18.4%、3歳児健診で14.9%、双方合わせると33.3%であった。また、3歳児健診では既に療育機関によりフォローされている障害児が1歳6か月児健診に比べて多く、過半数以上を占めていた。